

九州大学学術情報リポジトリ  
Kyushu University Institutional Repository

中村哲著述アーカイブ  
Nakamura Tetsu Digital Archive

---

## ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに

中村, 哲 著

### I JAMS発足をめぐって

<http://hdl.handle.net/2324/4772346>

---

出版情報：ダラエ・ヌールへの道：アフガン難民とともに,  
pp.13-56, 1993-11. 石風社

バージョン：初版、1993-11-30

権利関係：©Tetsu Nakamura printed in japan 1993

石風社より許諾を得て本文を公開しています。

公開しているPDFの印刷、複製および許可のない二次利用はおやめください。



KYUSHU UNIVERSITY

I  
J  
A  
M  
S  
発足をめぐって

## アフガン戦争

——冷戦下最後の代理戦争

我々ベシヤワール会ⅡJAMS（日本—アフガン医療サービス）の現地活動は、アフガン戦争なしに語れない。また、この十年は戦後世界秩序が大きな変動を経過した時期とも一致する。現地活動の背景をまず一瞥しておこう。

### ソ連軍アフガン侵攻

アフガニスタンの内乱は、一九七三年、ダウード政権がクーデターで王政を倒し、「世界の骨董品・アフガニスタン」の近代化を強行しようとしたことから始まる。一九一九年の最後の英国—アフガン戦争で外交権を奪い返した後、アフガニスタンは平和なたたずまいを享受して眠っていた。

険峻な西カラコルムのヒンズークッシュ山脈は、天然の一大要害である。アーリアンのインド侵入、アレキサンダー、サラセン帝国、モンゴリアのチンギス汗、ペルシア・インド諸王朝の支配、ロシアと英国の抗争……過去数千年にわたる歴史の荒波の中で、人々が固有の生活形態を守

ることを可能にし、三〇以上の民族と、古代から現代までを共存させる希有の世界を現出させていた。それがはた目にはいかに「中世的・後進的」であろうと、彼ら自身の生活の中で喜び悲しみ、戦い、耕し、牧歌的な小世界を守り続けていた。

しかし、世界的な近代化の波は、それを放って置かなかつた。カブール市民の間で何かを待望する空気が広まっていた。しかし、大部分の農村社会は〇〇主義などという政治思想とは凡そ無縁で、左右いかなる政党も決定的な影響を持てなかつた。アフガニスタンの悲劇は、米ソの激突という外圧に翻弄される運命にあつた。

一九七八年、急進的な共産政権の出現でダウード自身も殺された。イスラム住民の伝統を無視した強引な「改革」が断行されるに及んで、各地でムッラー（イスラム僧）がジハード（聖戦）を宣言、反乱は全国に拡大した。親ソ共産政権の倒壊を恐れて、一九七九年十二月、ソ連軍十万の大部隊が侵攻した。敬遠されていた「イスラム主義」が、人々に影響を増したのはこの時からである。

「ソ連軍アフガニスタン侵攻」の報は世界を沸かせ、翌年のモスクワ・オリンピックは米国の呼びかけでボイコットされた。しかし、誰もそれとは気づかなかつたが、まさにアフガニスタン侵攻が、ソ連自らを崩壊させる一つの契機となつたのである。

## カブールの知識層

「革命政権」もソ連軍も、余りに樂觀的であった。強引な改革で「一部の貴族」を根絶し、土地改革で農奴を解放すれば「人民」はやすやすと支配下に入るだろうと計算していたに違いない。だが事情はそんなに簡単なものではなかった。殆どの人々にとっては、西欧的な「国民国家」や「民主主義」など想像もつかない。あたかも日本の源平時代や戦国時代の古代・封建社会に



反政府ゲリラの大半は村の青年たち

「近代国家」を強制しようとする夢物語であった。固有の生活形態を守ろうとする住民の抵抗は頑強で、旧式の銃とソ連軍から奪った武器に拠って自力で抗戦し、政府軍の支配は点と線になった。だが、一九八四年八月、米議会が武器援助法を可決、米国の本格的介入によって内戦は代理戦争の様相を帯びるようになって

ていった。

尤も、内乱前の農村の困窮を知るカブールの知識層には、結果はともかく左翼勢力の過激な動きは解らぬでもなかったのである。一方で奢侈に明け暮れる大地主や有産階級があり、他方でその日の食にも欠く都市貧民と中世的な隷属農民がいた。都市知識層のこの焦燥感が王政廃止から共産主義政権への急速な移行へ道を開き、ひいてはソ連軍の介入を招く背景になったことは誰も否定しないだろう（これは、「イスラム原理主義者」でも同じ事が言える。彼らもまた都市の知識層であり、共産主義への反発から復古主義への傾斜を代表する動きであった）。だが、問題は都市生活の中にある彼らが、農村の本当の姿を理解できず、暗黒面だけが誇張されて、急速な近代化こそがアフガニスタンを救う最良の処方箋だと信ずる節があった事である。

その証拠に、難民化した人々の中で最も悲愴感を抱いていたのはカブールからの知識層で、天下国家を論じ、アフガニスタンの将来を憂え、多くの外国NGO（民間援助団体）で活動していたのは彼らである。いきおい、多くの外国人たちは彼らから情報を得てアフガニスタン像を組み立てていった。これをよそに、農民が大部分である難民たちは至って保守的かつ楽天的であった。殆どの難民は、「人道的援助」など無縁であり、ただただ食を満たし、故郷を踏みしめる「シヨラウイ（共産主義者）」に対する復讐とジハード（聖戦）に忙しかったのが現実である。

### 代理戦争

ソ連Ⅱアフガン政府側の対応は、ベトナム戦争のジェノサイド（皆殺し）以上の野蛮で粗雑なものであった。農村社会という「封建制の温床」そのものを破壊して近代化するという、農民にとっては迷惑千万な戦略が実行されたのは事実のようである。農村の破壊は徹底を極めた。内戦中に死亡した者は約二〇〇万人、難民として流出した者は六〇〇万人に上ると見られ、アフガニスタンは荒廃した。

一方、米国の対応が、「生かさず殺さず」戦争を継続させ、ソ連の国力を消耗させる戦略にあったことは、明らかである。中国から大量に買い付けられた武器が搬入され、ベシヤワール郊外にはゲリラ訓練施設が設けられた。一九八七年には地对空ミサイル「ステインガー」が登場し、破壊をさらに大規模なものにした。こうして、後に手を焼くことになる「イスラム原理主義」諸派の軍事的肥大を支えたのが米国である。

遠い日本には、この状況は殆ど伝えられなかった。冒険好きな写真家やルポライターがいかに命懸けで事情を紹介しようとしても、僅かな情報から天下国家を論ずる無責任なものとなり、接触した党派ゲリラの勇壮さのみが徒に伝えられた。シルクロードの異国趣味と大差なかった。

十余年の戦火によって、ただでさえ貧しいアフガニスタンの国土は焦土と化し、まるで中小火器の巨大な国際市場となった。難民を引き受けたパキスタンも、銃器類と麻薬の取引で治安の悪

化に悩み、政治的混乱が増大した。ソ連自身も過大な軍事的補給によって疲弊し、米国もまた、日本や東アジアの新興工業諸国との経済競争に押され、国力の衰退が明らかになった。こうして緊張緩和のムードが生まれ、一九八八年四月ジュネーブ和平協定が妥結し、同年五月からソ連軍の撤退が開始された。

これに合わせて「アフガニスタン難民帰還・復興援助」が国連主導でうちあげられ、世界は今にも難民帰還が実現するような錯覚を抱いたまま、ふたたび「アフガニスタン」は忘れ去られていった。

一九八八年夏頃から二〇〇を越える欧米・アラブ諸国のNGO（民間援助団体）が殺到、「難民帰還プロジェクト」はあたかも援助オリンピックの観を呈した。だが、国境のほんの数キロメートル先では激しい戦闘が続いていた。米ソの軍事援助は継続され、ソ連軍駐留時以上の混乱が現出した。当然、難民はびくとも動かなかった。

### 国際秩序再編

ソ連軍のアフガニスタン撤退は、世界秩序再編ののろしとなった。十余年の歳月は冷戦構造の重圧下でも、徐々に大きな変化を育んでいた。直ちにルーマニア政変、バルト三国独立、ドイツ統一、ユーゴスラビア解体と、東欧の激変が続いて、ついには一九九一年十月にソビエト連邦自身が解体した。アフガニスタン北方には、トルコメニスタン・ウズベキスタン・タジキスタン各

共和国が独立し、アフガニスタンの混乱は更に倍加した。

一方、中近東でも異変が起きていた。イスラム世界は、伝統社会と「近代化」との軋轢の様々な形で苦悩していた。一九九〇年に湾岸危機が発生、一九九一年一月には米国主導の多国籍軍がバグダッドを大空襲、湾岸戦争が始まった。動揺しつつあった欧米N G Oの山師的プロジェクトは、これによって大方が閉鎖を決定した。

一九九二年一月、米口の武器供与停止が行われ、アフガニスタン難民は自ら帰郷準備を始めていた。四月になってカブール政権が崩壊するや、それまでに事実上停止していた「難民帰還・復興援助」プロジェクトを尻目に、難民たちは爆発的に帰郷を開始、パキスタンに逃れていた三五〇万人のうち、約半数以上が自発的に、しかも殆ど「帰還援助」なく独力で帰ったのである。国連が「ロシア・英米と同じ穴のムジナ」として決定的に信頼を失い、民衆の間で嘲笑と反感を買ったのは自然の成り行きであった。

一方で混乱を加える軍事援助が、他方で国連による帰還・復興支援が、同時に与えられるという前代未聞の「国際援助」は特筆されてよい。兵器と札束によってさんざんな目にあわされ、翻弄された人々が、「国際秩序」なるものに懐疑的になっても不思議はないだろう。

かくて、この嵐のような激動の十年の中で、J A M S II ペシャワール会の活動は様々な意味で知られざる現実遭遇し、我々自身を問うものともなったのである。

## バジヨウル難民キャンプ——ALS発足とキャンプの実情

### ALS発足

JAMS（日本—アフガン医療サービス）の出発点は、パキスタン北西辺境州の「らい根絶計画」からである。私がペシャワールのミッション病院のらい病棟に正式に赴任した一九八四年五月はアフガン戦争の真っ只中で、越境する難民は北西辺境州だけで三〇〇万人に迫りつつあり、らいコントロール計画はその影響をまともに被っていた。らいは現在では治る病気であるが、結核以上に長期の服薬を必要とし、治療中断による再発は取り返しのつかぬ結果を生み出す。我々の治療下にあった多数のアフガン人患者がペシャワールまで来ることができず、定期服薬できなくなり、悲惨なことになった例もまれでなかった。

国境沿いの難民キャンプを狙い撃ちに、治療中断者と新患者を見いださねば「らい根絶計画」の成功はおぼつかなかった。同時に国境を越えて次々と現れるアフガン人の未治療患者の対策も痛感されていた。

らい根絶計画の実質的な本部であったカラチのマリー・アデレイド・レプロシー（らい）・セン



ALS 発足時のメンバー（左二人めからシャワリ医師・著者）

ターもこの点は理解していた。同団体は西ドイツのカトリック団体を主力する組織で、パキスタンの分離独立直後から活動し、政府の医療行政に入り込み、全土の計画を支え続けてきた。この総師がドイツ人女性のファウ医師で、自ら戦乱のアフガニスタン中で再三調査を敢行、「らい診療所」建設を画したが悉く潰えた。

一方、我々はペシャワールという土地柄、多数の難民、その救援団体、反政府ゲリラ組織との接触があり、アフガニスタン情勢をじかに理解できる立場にあった。カラチ側は、ペシャワール・ミッション病院のらい病棟をアフガン人患者の診療基地にすることを再三求めてきた。しかし、パキスタン側とアフガン側との折り合いが悪く、北西辺境州自体のらいセンター充実も急がれていたから、しばらく手につけられなかった。また、病院当局も「アフガン人問題」に巻き込まれることを

恐れ、らい病棟主任の私の独断で事を運ぶわけにはいかなかった。さらに、その財政的裏づけもなかった。

そこで一九八六年夏に、日本の民間の協力を呼びかけ、財政的基盤の見通しを得たうえで、同年十月に発足したのが、「アフガン・レプロシー・サービス（ALRS）」というアフガン人・チームである。これを基盤に我々は難民キャンプ診療に踏み込み、「アフガニスタン」について詳細な実情に触れ、やがてJAMS (Japan-Afghan Medical Service) に改組、後の大掛かりな「農村医療計画」に突き進む契機となる。

### 国境地帯のキャンプ

一九八七年二月、まがりなりにも態勢を整えた我々は、初めてアフガニスタン国境地帯に進出した。当時健在であったソ連Ⅱアフガン政府軍の越境爆撃は日常茶飯事であり、国境沿いに集まる難民キャンプの調査・診療は難航した。これらのキャンプは大抵「自治区」の中にあり、実態は外国人には殆ど知られていなかった。

我々が狙い撃ちにしたのは、バジョウルという国境地帯の自治区にあるキャンプで、アフガニスタンのらしいの最多発地帯・クナール州に隣接し、当時約五〇万―六〇万の難民が居ると見られていた。難民キャンプと言っても、反政府ムジャヘディン（イスラム戦士）・ゲリラの補給基地であり、男子成人の全てが越境して抵抗を続ける戦闘員と見てよい。まともな管理は不可能に近

かった。

ベシャワールで聞いた実情とは程遠いものであった。宣伝に反してキャンプへの援助は届かず、難民は殆ど自活していた。「難民」といっても、同一民族の居住地を移動するだけであるから、国境は無きに等しい。難民たちは自分で日干し煉瓦で泥の家を建て、密集して居住しているだけで、政治的束縛は殆どなかった。

これら耕作・放牧のできなくなった農民にとって、唯一の収入源は、ベシャワールへの出稼ぎと共に、敵からの戦利品（とくに銃器類）や麻薬などで、支援物資の横流し品などと共に堂々とバザールで取引されていた。

難民救済団体の集中するベシャワールで聞く限り、キャンプでの保健衛生活動は、「コミュニケーション・ヘルスケア」だの、「母子保健栄養プログラム」だの、全ゆる種類のプログラムの陳列場の観を呈していたが、実質的なものは殆どなかったと言つてよい。酷評すれば外国人のお遊びである。美しい「人道的支援」の業績報告と現実は余りに掛け離れていた。

### 国連の視察団

ある時私が宿泊していた難民キャンプで、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）担当官の視察があった。普段は空っぽの施設が前日から掃き清められ、突然忙しそうに立ち働く人々が現れた。翌日、国連の担当官がランドクルーザーを連ねてやってきた。単調な生活の難民キャンプ

## I JAMS 発足をめぐって



バジョウルの難民キャンプ。左のテントに UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の文字がみえる。

住民は、何事かと沿道に群れていた。私も人垣に混じって見てみると、いきなり護衛の兵士から怒鳴りつけられ、家畜が追い払われるように道を空けさせられた。担当官は難民施設を訪問して「視察」し、主だった地区を訪れて写真に収め、にこにこ握手をして引き上げて行った。その後人々の間では、「配給が増える」だの、「間もなく良い診療所ができる」だのと囁かれたが、何事も起きなかった。それどころか、診療施設は再び空になり、誰も来なくなった。

こんなことがごく普通にくりかえされたから、難民たちは国連や外国人のプロジェクトに対して猜疑心を持つのが常であった。配給物資の横流しやピンはねは日常茶飯事であり、難民救済資金のかなりの部分が組織運営に当てられ、「人道的援助」の中身は寥々たるものであった。時折、良心的な人々が視察に来て、短期ではせいぜいべ

シヤワールの本部で業績を誇示され、外国人の行きやすい近辺のモデル・キャンプを見せられて帰るのがおちで、実情は伝えられなかったと言える。

通常の「短期視察」は、過剰包装の包み紙から中身を判断するに等しい。また、我々が地域のニーズという時に問題なのは、誰から何を聞いてそう判断したかである。アフガニスタンに関する限り、英語を使って外国人と接し得るのは極めて限られた都市知識層であり、彼らは田舎の実情など本当には殆ど知らぬことも多い。同国人でありながら、西欧化した精神構造を持っているから外国人には話を通じやすい。いきおいその口を通して外国人は「実情を理解する」ことになる。

「この悲惨な状況を見てください」という時、それが中流以上の都市生活者の場合、まゆつばである。山岳地帯の実情を知る者は、都市の生活意識を基準にすれば悲惨であっても、当の農民たちはそれほど「悲惨」とは思っていないことが多い。一般に悲愴感は都市から逃れてきた難民に強かった。都市からの難民はキャンプには皆無に近かった。

例えば、「キャンプには電気も水もない」と嘆くのは愚かで、乗せられてはいけない。延々時間をかけて水汲みに行く光景は、アフガニスタンの山岳地帯では日常なのである。大部分の難民たる農民たちは、天下国家を論ずるでもなく、国家の将来を憂うでもない。もともと「国家」など彼らの頭の中にはないのである。彼らの悲惨さは、決して生活の困窮だけではなく、故郷を失い、異郷の事情に束縛されて自由に農耕・牧畜ができない「奪われた固有の生活意識」そのもの

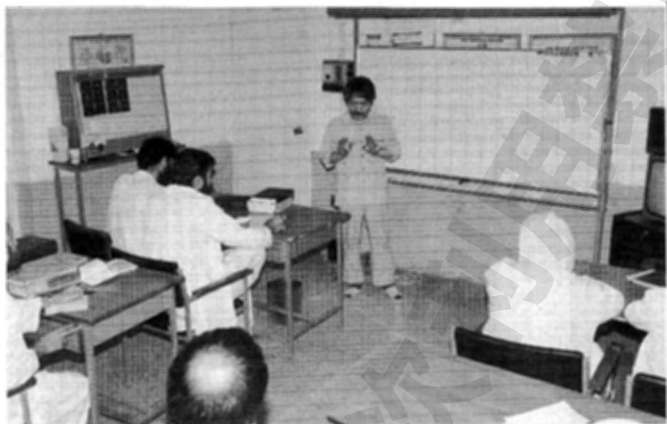
のにある。

アフガン戦争の発端自体が、これらを顧慮しない強引な近代化にあったといえよう。共産主義政権によるクーデター前夜のカブールでは、都市知識層の間で農民の困窮をモチーフとする社会派の文学が流行り、多くの人々の同情を集めた。急進的改革を目指したタラキやアミン旧大統領自身が、このような正義にはやる文学青年たちであった。彼らがいかに教条的な共産主義者であろうとも、私はその素朴な正義感を嘲<sup>あざわら</sup>わない。彼らもまた、「近代化」に欺かれた犠牲者であつたろう。ソ連軍の兵士とて、いくばくかの大義を心に抱いて戦っていたであらう。

問題は、自分のものさしで他人の幸・不幸を裁断し、文化や生活意識の差異を優劣で論ずることにある。あげくは越えがたい溝を作つて相互不信をエスカレートさせる。この点では、アフガニスタンの近代化を急いで国土を廃墟にした正義漢たちも、難民援助に殺到した人道主義者たちも、大差が感ぜられないのである。これは極論かも知れぬが、現地で見る限り、異文化に対する我々の理解の浅薄さを身に染みて感じた。

### まず人材養成

こうして一九八六年以来、主として北西辺境州のらい根絶計画の延長として開始された活動は、いくつかの壁に突き当たった。先ず、難民という位置があくまでも一時的なものであり、当座は何とかしのげて、「定住者」に対するような地についたプログラムが不可能なことである。つ



人材養成のためスタッフに講義する著者\*

まり、内戦後のことを射程に入れないと、結核以上に長期にわたるらしいの定期服薬や合併症治療はできないことである。

第二に、多くの無医地区で「らいだけを対象とする診療」は人道上不可能なことである。下痢で死にかけている子供や、マラリアで震えている人々を尻目に、「らいでないから診ません」という訳にはいかない。また、それでは、人々の協力も得られない。

そこで、内戦の中で徒に冒険をおかして活動せず、人材を育成して機が熟するのを待つべきことが痛感された。このような問題意識の上に、組織再編上で決定的な転機となったのが、一九八八年四月のジュネーブ和平協定によるソ連軍撤退開始であった。

世界中が沸きかえり、二〇〇以上もの欧米・アラブ諸国のNGOが押しかけ、山師的プロジェクト

トが横行したのは先に述べたとおりである。当時の戦乱の中では、「復興支援」など無理で、各国は援助オリンピックで単にその「プレゼンス」(存在)を示すに止まったと言えよう。そこで、わがアフガン人チーム(ALS)は、これまでの医療活動を更に進め、アフガニスタン国内で独自の「無医地区診療態勢」を実現すべく、将来に備えて人材育成して待機する事を提唱した。日本側のペシヤワール会もそれを受けて協力を約し、ここに装い新たに名前もJAMS (Japan-Afghan Medical Service=日本・アフガン医療サービス)とし、再出発したのである。

この計画は、派手だが実のない援助ラッシュの中で軽挙妄動せず、現地人材養成を主眼とし、内戦後にアフガニスタン北東山岳地帯に中小規模の診療所を配備、保健衛生を含めて地域共同体と共存できる無医地区診療モデルを実現、同時にらしいの多発地帯に重点を置くことによって、一挙にらしいの震源地を叩こうという雄大なものである。もし実現すれば、かましい割に実のない「コミュニティ・ヘルスケア」をはじめ、先進国側のアイデアの常識を覆す独自のものとなる。

この背景は多少説明を加えておいた方がよい。戦後先進医療技術を発展途上国に移植すれば自ずと現地での発展が期待できるという楽観的な希望があったが、早くも一九六〇年代初めには崩れ去った。財政・技術・交通あらゆる面で先進国と途上国との格差が大きく、その方法ではごく一部の都市階層に恩恵を与えたのみであった。そこで、福祉が住民に行き渡らぬという反省から生まれたのが「コミュニティ・ヘルスケア」である。分かりやすく言えば、予防に重点を置く保健衛生対策だが、一時は欧米諸国の金科玉条の医療援助モデルとして大流行した。「コミュニティ

「イ・ヘルスに非ざれば医療援助に非ず」とさえ囁かれる向きもあった。援助される側も、これを言えば予算が取れるので、いつそう拍車をかけたのである。

もちろん、援助効率や底辺の民衆を視野に入れる戦略としては正しかった。しかし、悠久の歴史をもつアジア伝統社会の中で、近代的な衛生思想を流布し、都合のよいところだけをつまみあげる事はできない。伝統と風土の厚い壁に阻まれて考えられるほど効果が上がらなかったのが実情である。強行すれば住民の生活形態そのものを変えねばならず、地域の生態系にも重要な変化をもたらすという矛盾に各地で突き当たった。現在はその反省期にあるが、日本では流行が始まったばかりなのである。この点では、欧米諸国に三十年遅れていると言わざるをえない。

以上のような事情で、我々の計画は、協力する側の我々にとってもまた、民間はおろか世界の政府レベルの援助でさえできなかった壮大な挑戦となる。誇張ではない。いっただい補給さえ可能なのか、私も不安がないではなかった。だが、敢えて挑戦するに値する事業だったのである。

## JAMS 国内診療所の下工作

### 外国 NGO の殺到

一九八九年一月一日、アフガニスタン復興のための農村医療計画の一環として「診療員養成コース」が始まった。これは出発点であつたらい根絶計画を念頭において、らしい多発地帯・クナール及びその周辺の山岳部を主な拠点にしようとしていた。

二十名の候補者の選抜は慎重を要した。当時「ソ連撤退」と「アフガニスタン難民帰還」が世界中で大々的に報じられており、二〇〇を超える各国 NGO が津波のように押し寄せ、当然莫大な金がペシャワールに流入した。家賃や物価が高騰し、金に糸目をつけぬ人材雇用はそれまでの賃金バランスを壊してしまった。紙上の名論卓説が幅をきかせ、援助側の論理が地元の実情を無視して動いていたといえる。だが、いずれも長期的見通しのプロジェクトではなく、雇われるアフガン人の方も行きずりの外国人のカネに群がる蟻のような有様だったと述べても過言ではない。

「○○人材養成コース」の募集を出せば山のように人を集めることができた。

しかし、これでは故国再建というには余りにお粗末で、とうてい継続的なプロジェクトを遂行することができない。そこで我々が行ったのは、これらの人材を直接予定活動地から抜擢することであった。それも、どんなに優れていても故郷に愛着のない者は採用せず、「自分の村の再建」への情熱を重視した。

#### 内戦下テメルガールに診療所

一九八九年夏には早くも国内診療所の候補地選定が具体的に開始された。これは当時の情勢から隠密裡に運ばれ、その意図を知る者は私とJAMS幹部の数名だけであった。

当時カブール政府軍の勢力は依然として強力で、米国に後押しされた各政治党派も正規戦においては敵ではなかった。特に主要基地ジャラバード防衛を目的にクナル南部からドラエ・ヌール下流のシェイワにかけて壮烈な争奪戦が展開されたが、制空権もなく火力に劣る反政府党派の軍勢は苦戦を強いられていた。党派側の足並みも揃わず、系統的な指揮を欠き、徒に破壊と犠牲を大きくした。結局一九八九年末までには政府軍はシェイワ南方に押し返されたが、要衝の丘陵には依然として軍の砲台が睨みをきかせていた。

同地点は我々の診療所開設地点の入り口に相当するから、JAMSとしては住民の協力と信頼を得るため、大変な神経を使った。ドラエ・ヌール溪谷下手の住民の大部分（推定約四万人）が



アフガン国境に近いテメルガールの診療所。  
朝早くから患者たちが待っている

パキスタン側のバジョウルやモハマンド自治区に難民として逃れ、国境沿いの人目を引かぬキャンプで惨めな生活を強いられていた。国境地帯にはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の目が届かず、配給も遅れがちで、ほとんどの難民は自活していた。成人男子はムジャヘディンとして越境してゲリラ活動を行い、一部は溪谷の山岳地帯に留まって抵抗を続けていた。しかし、一九八九年頃までには、軍事的抵抗は各政治党派が主導権を握り、地元住民を無視して傭兵化した軍勢が勢力を張っていたのである。

このため翌一九九〇年十一月、同地域からの難民が訪れやすい北部国境地帯のテメルガールに難民診療所を開くと共に、各政治党派とは等距離で付き合いつつも、地元出身スタッフのゲリラ活動を禁止しなかった。時には積極的に「実地検分」を行って地元との親交を深めた。一九九〇年頃ま

で一部JAMSスタッフは地元ゲリラ部隊と共に対空砲火器を手にして空爆に耐えていた。

このような実情がなぜ日本や世界各国に伝わらなかったのか、いまだに私は不思議である。国境のほんの数キロメートル先では銃弾が飛び交い、政府軍―反政府党派―地元ゲリラの三つ巴の戦いが続いていたのである。「アフガニスタン復興」が世界的に伝えられるや、幾人ものボランティアが協力を申し出てきたが、明らかに時機尚早であり、事実上我々には中に入らせなかった。

ここで日本の事情が分かる私が、ボランティアたちに対して、少なからぬ神経を使ったことを回想しない訳にはいかない。あからさまに現地の実情が伝われば、おそらく日本側から無謀だの危険だのと言われ、あげくは「勇気ある撤退」などという口上が説得力を持つに違いあるまい。

だからとて、正義感に駆られてやってくる人々を簡単に中に送れば、実際に危険だけではなく、習慣の相違から必ずすれ違いを生じて良い協力の芽が摘まれてしまうだろう。また、屍の累々たる現状を見る者は、その凄惨さに目を奪われ、部分的な扇情的事実だけが誇大に、誤って伝わるだろう。まして、ボランティアとは行きずりである。現地としては、世話に気を遣ったあげく、彼らに攪乱されてはかなわぬ。長期的な補給、息長い下準備という点から見て、余りにマイナスの要素が大きかった。

そこで、ペシャワール会からのごく気心の知れた「身内」を除いて、花を持たせて帰国願ひ、「アフガニスタン」については時機を待たせざるを得なかったのである。

## JAMS発足

### 七名でのスタート

一九八九年一月一日、診療員コースは予定通りペシャワールのJAMSオフィスで開始された。同時に十床の入院設備、外来、検査室が小規模ながら開かれた。これは一九八八年九月に最終立案が行われ、その中核となったのは私とシャワリ医師、ムーサーなどで、その他ALS（アフガン・レプロシー・サービス）時代からの四名の古参メンバー併せて僅か七名が必死になって活動を開始した。

私は依然として日本の派遣団体との契約が残っていたから、ペシャワール・ミッション病院らしい病棟責任者を兼任し、午前中はらい病棟で、午後はJAMSに、時間を割いて働いた。だが、JAMSが手薄であったので、休日を返上して週三四日をJAMSの外来に当てた。当時ペシャワールの下層民の間では私の名がよく知られており、JAMS側もそれを利用したかったのである。外来は一〇〇―二〇〇名程度で、殆ど朝から日没まで働いた。

患者はたちまち爆発的に増えたので、私の健康を心配したリーダーのシャワリ医師はついに番



JAMS の正門

号札制にして一日一〇〇名に限定した。薬品が底をつき、補給が間に合わなかったせいもある。赤痢・腸チフス・アメーバ症・マラリア・結核・リウマチ熱・髄膜炎・てんかん・銃創外傷・中耳炎・トラコーマ・皮膚疾患などが主で、処置も多種多様であり、お陰でシャワリ医師や検査室の力は向上した。こうして一応の診療態勢を整えてから「養成コース」の卒業者を迎える手筈であった。私も「熱帯医学」(英国リバプールの熱帯医学校)の学び甲斐があったと思った。

しかし、六カ月のインスタント訓練で臨床経験のないままいきなり働けるものではない。三年間の訓練を受けたミッシェン病院のらい診療員でも多々不備があったのだから、彼らを本格的な医療技術者として育てるためには数年を覚悟せねばならぬ。一九八九年当時、助手として

使えるのは、らい病棟で助手として私を何年も手伝っていたカダム、多くの手術を共にこなしてきたアーベッド、農芸化学から検査室に転じたサイド・アフマッドくらいのもので、医者は私とシャワリ医師しかいなかった。これら僅か七名の者が核になってJAMSの診療を担うという、心もとない話であった。

カダムは私が一九八四年に赴任して以来ペシャワール・ミッション病院らい病棟にいた患者で、当時はまだ十二歳程度の少年だった。アフガニスタンのバダクシャン出身で、二歳上の兄と共に入院したが、兄の方は私の着任直前にひどい反応を起こして、喉頭浮腫で窒息死した。その当時はアフガン戦争の最も激烈な時期で、家族との連絡も途絶えていた。病棟で私の助手をしていたが、将来の見通しがたたず、らい根絶計画の本部も「社会復帰」にアイデアを出すだけだった。そこで、「せめて病棟での手伝いのお礼に」と奔走して教育機関を歩き回ったが、結局どこも受け入れ先がなかった。折よくJAMSが発足したので、とりあえず準スタッフとして雇用させたのである。初任給は二〇〇ルピーであったが、経験の生かせる安定した職場としては上出来となった。一時はシャワリ医師の家にあずけ、躰と簡単なペルシャ語の読み書きはできるようになって、今やJAMSの中核の一人という訳である。

「心もとない」と述べたものの、こうして気心の知れた、小さいが良いチームワークでJAMSがスタートできたのは幸いだった。家族的な雰囲気で結束ができあがり、後々まで彼らが中心になる。

## 貧民層と富裕層

この地域では、貧民層と富裕層とは殆ど分離した世界に住んでいると言つてよい。外国人は案外知らぬが、口コミのニュースはたちまち貧民層にゆきわたる。我々外国人が公的な機関や富裕階級との付き合いだけで「これが地元との接触だ」と思うのは大間違いで、もし膨大な水面下の人々にアピールしようとするなら、何も特別な宣伝は要らない。ひたすら黙々と誠実な仕事をしておればよい。かくて半年の間に北西辺境州側の難民や住民はもちろん、アフガニスタンの内部でもJAMSの名が自然に知られるようになった。

しかし、他方でビザや関税のからみで、行政や上層の人々の間にも信頼を得る必要があつた。そこで、パキスタン側のらい根絶計画との兼合いもあつて、ペシャワール大学医学校の付属病院で神経病学の定期カンファランス（臨床講義）を開いた。中心となつた大学の精神神経科では、シャフィーク教授以下若い医師たちに大歓迎された。もう捨てたと思つていた自分の専門がこんなところで生かされるとは、思いも掛けぬことだつた。特に脳波計の導入はペシャワールで第一号となり、わかりやすいテキストを翻訳作成し、教室は「神経学ブーム」となつた。

たまさか、交通事故で入院中の整形外科教授が昏睡状態に陥ろうとした。大学病院内部で精神科と内科の講師陣とが診断を巡つてわたりあい、私は精神科を助けて「慢性硬膜下血腫で緊急手術が必要だ」と主張、CTスキャンが当時なかつたのでイスラマバードの軍病院に搬送されて診断を確認、教授は一命をとりとめた。精神科教室は大いに誇りに思い、自信をつけた。内科から

も関心が寄せられ、州の内科学会でらしい講演を指名されたこともあった。こうして、「小さくともJAMS侮り<sup>あなど</sup>がたし」との印象を公的機関に与え、パキスタン側とも良い繋がりが深まったのである。

次の段階で苦心したのは、「日本人医師・ナカムラ」の個人的「名声」を、いかにJAMSとらい病棟に返上するかであった。このため、「JAMSの当番医」などと称して、挙動から私をアフガン人医師と思う患者にはそのまま誤解させ、少しづつ他の若い現地出身の医師と混同されるようにした。時には意図的に手を出さぬことも必要だった。このようなことは何でもないようだが、大切な配慮で、私がいなくなると仕事が進まないのでは本来の意味がなくなるのである。

# 難民コミッションナー

もうひとつ、パキスタン連邦政府との関係で重要なのは「難民コミッションナー」であった。パキスタンで最大の難民を抱える北西辺境州の担当官は最も力があり、難民に関する権限はその一手に集中していた。小さなJAMSにとっては、一つの許可証を得るのさえ手間取るありさまで、仕事を進めるには大きな難関の一つであった。日本でも同じであるが、公式の顔は崩さずとも、やはり気心が知れる関係というものは、決定と優先を置く上で大切である。このような人物と親しいのは、吹けば飛ぶようなJAMSを法的に守る意味からも大いに役立ったのである。

一九八五年から九〇年まで北西辺境州でこの要職にあったのは、サイド・アクタル氏であっ

た。彼は文学教授から拔擢され、官僚としては異色の逸材であった。南部のパシュトゥン部族出身、彼自身がウルドゥ語詩人で、日本文学にも造詣が深かった。彼は俳句に模したウルドゥ語の三行詩、「ウルドゥ・ハイク」の草分け的存在で、そのせいか大変な親日家であった。彼と近づきになったのは、その妻の関節痛が機縁である。どこで噂を聞きつけたのか、氏を介して私に診療の依頼があつてからのことである。彼女は英語が不得手で、外国人とは余りなじみがなかった。私が比較的よくウルドゥ語を解するので親しみをもつたのだらう。そのうち互いに私宅を自由に訪問して、JAMSのことも気軽に相談できるようになった。

ともかく、これで日本から送られる物資や車両の免税措置も、彼の達しで随分速やかになったのである。しかし、私は利用する積もりで意図的に付き合いを深めた覚えはない。一九八六年に、欧米宣教グループとの確執やJAMSの公的認知で我々を助けて以来、一九九〇年に悪性リウマチで退官するまで、彼は一貫してパシュトゥンとしての友情で私を遇した。

彼も典型的なパシュトゥンらしく義理堅く、日本からやってきた名古屋の支援団体のときなどは、少々やり過ぎだが軍隊や警察まで駆り出して、さながら閱兵式のような熱烈歓迎まで準備したこともあった。日本の一行はさすがに辟易し、結果的に難民キャンプの下々の実情を知ることが妨げたが、決して為にするところがあつたのではない。彼としては、友人たる私の「客人」の歓待を、自分流で精一杯しようとしたのである。時に公私混同でJAMSも恩恵に浴したのだが、これは現地が露骨なだけで何もベシヤワールで特別という訳ではない。

パシュトゥン

サイード・アクタル氏は本音をよく話してくれていた。裏表があるようでないのが、何とも言えずカラッとしていて嫌みがなく、いかにもパシュトゥンらしい。

「だいたい、我々パシュトゥンに『援助』しようなんて言うのが、知らぬが仏というものですよ。」

私は度肝を抜かれて、「そんなこと、あなたが言っていていいんですか」と尋くと、からからと笑い飛ばしながら言ったものである。

「パシュトゥンほど助けがいない人種もなからう。鉄砲撃つばかりが得意なんだ。先生が一番ご存知じゃありませんか。スワビのトルコマンのキャンプを見てご覧なさい。わずかな援助で立派に自活したうえ、国にいるときより生活は向上している。そこにゆくと我々パシュトゥンは、同胞ながら情けない。争う、殺す、統制がない、ドブに金をつっこむようなもんです。わたしやお役目上、外国の援助とりつけで一応頑張ってますが、時々イヤになりますよ。」

しかし、パシュトゥンたちにありふれた、この手の自嘲を一緒になってあげつらってはならない。これは一種の照れかくしで、この自嘲のウラには同じ程度の誇り高さがある。

「パシュトゥンだっていろんな人達がいるんじゃないですか。」

「そりゃそうだ。援助する人にいろんな人達がいるようにね。これだけのカネが動いているの

に、どれだけ難民に恩恵がいつているのか、怪しいもんだ。UN（国連）やNGOの外国人のサラリーをルピーに換算して見たまえ。地元の人目は目を回して死んじまうよ。難民は、いわば三流外人の雇用機会も提供している訳だな。」

私はますます啞然として聞いていたが、言いにくいことを平気で言うものである。

だが、こうしてサイド・アクタル氏のような正直な人々が上層部でも損得ぬきの好意で協力してくれたことは、力も金もないJAMSにとって、本当にありがたいことだったのである。

## クナールの攻防

### 一千万発の地雷

一九八九年二月、JAMSの「診療員養成コース」がスタートした直後、国内診療所の有力候補地のクナールでは激戦が展開していた。ソ連軍の完全撤兵に呼応して、カイバル峠のアフガニスタン側ふもとにある要衝都市ジャラバード攻略が始まった。これは各反政府グループが共同行動した。各党派の主力はカイバル峠を越えて進出し、ジャラバード北部からはクナール河沿いに地区ゲリラ部隊が進んだ。

正確な数は明らかでないが、政府軍守備隊数千名に対して、数の上からは数倍の兵力だった。米国から補給されたソ連製・中国製の銃器類と米国製の対空砲火器で武装した反政府側は、地上軍をジャラバード近辺に封じたが、制空権は政府側にあり、空からの攻撃に悩まされ、推定一万人以上という多大の死傷者を出した。ジャラバード陥落はならず、攻略は延期された。これは、反政府側の内部対立、政府軍火力の過小評価はもちろん、ゲリラ戦と正規戦とは戦術戦略

の質が全く異なることがあった。近代的に組織された軍隊と一匹狼の大群とが正面から衝突するのでは話にならなかった。

さて、我々の標的地クナール溪谷では、パキスタン側からナワ峠やミタイ峠を越えて、続々とゲリラ部隊が進攻し、内部の各地区のゲリラがこれに呼応した。その結果、政府軍はクナール河沿いの盆地からほぼ一掃され、ジャラバード近辺のシェイワまで反政府勢力の支配下に入った。村落の破壊はこれによって倍加した。ジャラバード周辺地区と主要道路のまわりに地雷網が張り巡らされ、より強力な装備を与えられた反政府側の攻撃で、公共の建築物は瓦礫と化した。ことに政府軍側の無秩序な地雷埋設は厄介で、控えめな発表でアフガニスタン全土で三五〇万発と伝えられた（その後、「約一千万発」と訂正された）。

ダラエ・ヌール溪谷に近いシェイワでは、幹線道路を囲むわずか五キロメートルの林だけで三万発の地雷が埋設されたのだから、その凄まじさは想像できよう。地雷も、時限装置付き、人間だけを感じするセンサー付き、不発弾を模したものなど、三〇種類もある多様なもので、米軍がベトナム戦争中に使用したものに更に工夫が凝らされている。

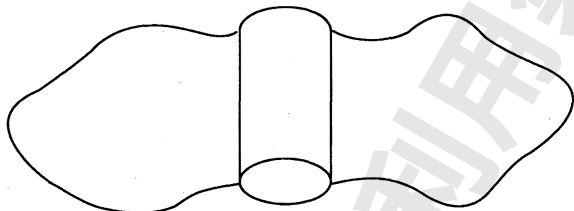
中でも警戒されたものに通称“バタフライ”がある。これは人の掌程度の大きさのプラスチック製で、名前のとおり蝶の形をしており、ピンクなどの奇麗な色で一見おもちゃのように見える。殺すよりも重傷を負わせることが目的で、破壊力は小さい。つまり、直ぐには死なず、周囲のものが介抱するので部隊の行動が鈍り、全体の機動力を落とすという訳である。手の込んだ仕掛け

## I JAMS発足をめぐって

### ●無差別殺傷をねらったソ連製の地雷

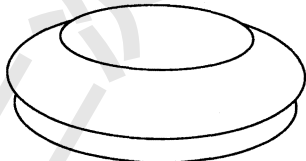
アフガンの地には今なお無数の地雷が埋まり復興を妨げている

“PFM-1” 通称 <sup>蝶</sup> Butterfly



プラスチック製、羽に美しい色がついている。羽の中が爆弾。  
子供たちがおもちゃと思って遊んでいるうちに爆発

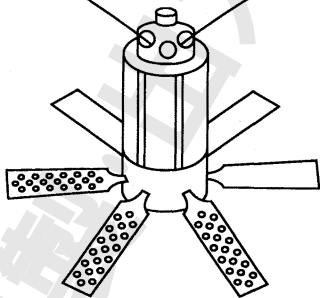
道路など地中に埋め、土をかけてある。5～20キロの圧力で爆発する



SB-33

8.5mの  
アンテナ

POM-2S



8.5mの

金属線

その先端  
の重り？

POM-2S はヘリコプターからばらまかれる。空中で6枚の羽が開き、植物の種子のように風に吹かれて飛んでゆく。

地上に落ちると、8.5メートルの金属アンテナが2本のびる。このアンテナに触れると爆発、本体が細片となり15～20mとび人畜を殺傷する。

は、一回触れるだけでは爆発せず、五グラムの圧を数回かけると爆発する。子供が路傍で拾い、何事もないので家に持ち帰って遊ぶうちに爆発することも多い。この「バタフライ」は明らかに非戦闘員の殺傷をも目的としたもので、数百万発が空からまかれ、一部は河の流れに乗ってペシヤワールまで至り、多数の子供たちが犠牲となった。

私はこのような爆発物を考案した人間と会ってみたい。いや、考案したのは人間ではなからう。殺傷の効果を冷静に計算する非情な機械だろう———と思いたいが、紛れもなく人間の手によって作られ、人間に対して使用されたのである。憎しみの激突する刀剣や銃砲での白兵戦なら、良いことではなくとも、まだ解りやすい。だが近代技術は、精神科医が「情性喪失」と呼ぶ恐るべき病理を人類に拡大再生産したのである。

数年後、湾岸戦争が勃発したときに私はたまたま日本に居たが、戦争をまるでファミコンでも見るようにテレビにかじりつく人々に、やるせない嫌悪感を覚えた。「戦争」はゲームではない。肉片が飛び散り、鮮血が流される、まぎれもない大量の人殺しと狂気である。瞬時に知友や肉親の生命が断たれ、負傷者がうめく。まさに地獄図である。兵士もまた、或いは自分の死をも虚飾で欺き、或いはグロテスクな利那主義で感性を荒廃させる。

私は安易なヒューマニズムに基づく死刑廃止論に疑問がある。理由もなく他人を死に至らす行為は、死という冷厳な現実を以て審き、生の尊さを知らしめるべきである。日本で、憂さ晴らしに女性を数ヵ月監禁して暴行を加えコンクリート詰めにした事件や、少年達が集団心理で浮浪者

をなぶり殺しにした事件を聞いて慄然としたが、各人が集団性の中で罪悪感を持たなかったという事を聞いて更に恐怖感を覚えた。飛躍するようだが、まさにこれは集団による殺戮行為たる戦争の心理に通ずる。私がもし殺された者の肉親であれば、たとい法で罪に問われようと、あらゆる手段で断固たる私的制裁を加えただろう。

世界に冠たる平和憲法を戴く一小国民として、私は日本人であることを誇りに思っている。しかし、最近の日本を思うと、「戦争体験は充分には語り継がれていない」というのも哀しい実感である。

#### リトル・モスクワ

さて、我々の標的地ダラエ・ヌールでは、JAMSの溪谷出身スタッフも地区ゲリラとして戦闘に従事していた。溪谷下流域からクナール河を挟んで標高五〇〇メートル程の高地が正面にあり、その頂から発せられる政府軍の砲弾はゲリラ部隊の南下を寄せ付けなかった。空からは連日ヘリコプターが舞って機銃弾を浴びせ、戦車隊まで投入して下流域の保持を図った。

ソ連軍撤退まで、この谷の下流はゲリラたちに「リトル・モスクワ」と呼ばれ、近隣地帯制圧の軍事基地や管理施設はもちろん、「女性解放」のための教育センターまであった。地域を熟知する共産党員がカプールから配属されて力もち、巧みに各地域を分裂させて政府軍支配を助けた。



空襲に備える村民たち。村民がゲリラでもある

政府軍側は特にクナールに於いて極めて苛酷な挙に出た。抵抗する村落は空襲と重火器で容赦なく破壊され、廃墟と化した。沙漠の中の遺跡と見違う光景が広がり、溪谷は無数の墓標で埋め尽くされた。軍の余りの残虐さに住民の敵意は燃え上がり、難民となった彼らは、戦局の好転を見るや、大量の犠牲をもとめせず、政府軍に敢然と襲いかかった。

一九八九年夏までには、シェイワ高地の軍事基地を除いて、ダラエ・ヌール溪谷全体から政府軍が駆逐されたが、なお散發的な爆撃が続いた。このため、対空砲火器が搬入され、南下を阻止された軍民が逆に防衛的な立場になっていた。一部難民は様子を見るためにゲリラと共に三々五々帰郷し、荒れた土地の修復を始める者もでてきた（というより、ゲリラそのものが難民である場合が多かった）。

## ジハード

日本人に分かりにくいものの一つが、「ムジャヘディン（イスラムの聖戦士）」である。政治的なイスラム原理主義の横行で、猛々しい狂信的イメージだけが定着しているようだが、決してそうではない。元来これは、イスラム教徒に課せられた「六信五行」の義務の一つ、ジハード（聖戦）に参加する者のことを言う。即ち、外敵から自分の信仰を守るために戦うもののことであって、何らかの政治思想とは無縁のものである。内戦の初期、旧ソ連・アフガン政府軍が「神はいない」などと公言してはばからず、徹底的な宗教撲滅キャンペーンを行ったとき、イスラムの共同体を生活基盤にしてきた者にとって取り得る唯一の反応がジハードに参加することであった。

当然、ドラエ・ヌール渓谷でも、全住民がムジャヘディンとして銃を取った。住民にとって聖戦とは、完全な意味で自分の村と血族の防衛に等しかった。村々が廃墟となってパキスタン国境地帯に「難民」となって逃れても、彼らがイスラム教徒である限り、この抵抗は執拗に続けられた。ムジャヘディンの大部分は地元住民そのものであり、〇〇党などとは無関係に各地域で抵抗が自発的に行われていたのである。

政治党派が頭角を現してきたのは、諸外国からの金と武器が入り始めてからである。だがそれでも、殆どの農民たちは、ニュースで報道される「〇〇派」の動きとは全く別の次元の動機で動いていた。ドラエ・ヌールに関して言えば、大ざっぱに、ソ連・政府軍勢力、イスラム諸党派、旧左翼勢力が入り乱れて抗争していたが、本来の地元勢力は、政治党派間の確執を巧みに泳いで

結束し、臨機応変に対応してジハードを継続していた。彼らの動きこそが真に事態を決定する鍵であった。

後に我々のスタッフとなる一部の地元出身者は、ダラエ・ヌール下流出身のパシュトゥンで、JAMSの幹部の一人、ムーサーの配下に「リトル・モスクワ」の攪乱を目的に何年もゲリラ活動に従事していた。上流はパシャイー部族という別の民族が難民にもなれずに自給自足に耐えていたが、素朴なイスラム教徒である彼らは地区ゲリラに同情的であり、かつ協力した。ムーサーたちもこの山岳部を根城に戦っていた。その後我々が奥地の山村で多くの協力者を得たのも、そのお陰である。

だが、戦闘の主力が次第に政治党派の傘下に入り、その横暴が目立つに至って嫌気がさし、ペシャワールのJAMSの下で中立の立場を守った。彼らは「戦闘を建設に、弾丸を薬品に」というJAMSの呼びかけに心から共鳴した。ともあれ、こうして我々は、地元住民の心を掴むと共に、その苦悩を下から理解できたのである。「国内診療所」に向けて、着実な足固めが開始された。

## 「独力補給」への決断 — A C B A R 参加をめぐって

### 政治的無方針

諸外国 N G O (民間援助団体) は一九九〇年当時ゆうに二〇〇を越えており、この調整のために A C B A R (アフガニスタン復興救援調整委員会) が結成され、情報交換や担当地区の割り振りが、少数ながらスーダンなどのアフリカ系もあり、まさに「援助オリンピック」の観を呈したのである。日本の団体は J A M S のみで、それも予算規模は年に一二〇〇万円以下という最下位であった。A C B A R が発足したのは一九八八年八月のことであったが、会合がペシャワールの最高級ホテル・パールコンチネンタルの豪華な会場で開かれた為に一部の N G O から批判があったりして、初めから足並みが揃わなかった。米政府の別動隊とも云うべき U S エイドは全体の動きの公表を避けていたし、サウジアラビアやクウェートなどのアラブ系は独自の動きをしていた。J A M S のシャワリ医師は情報収集とある程度の予算獲得を期待し、A C B A R に名を連ねる

ことを主張した。確かに我々の活動が日本の寄付者から予算を得る「ハクつけ」になる可能性があったので、一応私も賛成した。シャワリ医師の係累であるガフリ氏が常任委員として入っており、その顔も立てねばならなかったから、発足当時としてはJAMSの参加は当然のように思われた。

しかし、やがてスウェーデン系を中心とする古参団体の独壇場となり、他方でアフガン人の間ではイスラム急進主義の色調が濃くなってゆくにつれて、私もこのACBAR参加を懸念するようになった。また実際問題として、専門の事務職も居ないJAMSが、送られてくる膨大な資料に目を通して月に一度の会議に出席する余裕がなかった。それでも、当時「アフガニスタン復興」全体の最大のスポンサーが日本政府であることもあり、ACBARとしては我々を刺激したくなかったと見える。参加費を払わなくなっても会議の投票権があり、情報は送り続けられていた。

JAMSがACBARと距離を置き始めたのは、アフガニスタン難民の間でACBARに連なる団体が「反イスラム的」との印象が強まり始めてからである（当人たちは無視または軽視していた）。また、かれらと我々とは、明らかに事業のスタンスに隔たりがある。年単位の事業計画書を提出して業績達成を語るなど、出来ぬ相談であった。余りに山師的なプロジェクトが目立ったので、私は脱退を提唱した。当時イスラム急進主義側の挑戦がテロという形で活発化し、リベラル派はACBARを隠れみのに使う向きもあって、私は総ての欧米団体との提携を断絶するつもりでいた。



アコラハタックの難民キャンプで診療するドクター・シャワリ

シャワリ医師をはじめ、カブールから来た事務系のスタッフは存続を唱えていた。

「一応参加しておいた方が、何かと便利ではないですか。国際的な動きとして将来ACBARがアフガニスタン国内で大きな役割を果たすこともあるのではないですか。」

「たとえそうであっても、一時的だ。『民主化』

を盾にする経済的強圧で将来の指導者が妥協しても、人々が承知すまい。君たちの方がよく知つていよう。今の欧米諸団体のやり方は伝統社会を軽く見過ぎている。現にテロの対象となっているのは彼らにつながるアフガン人ではないか。」

「JAMSはイスラム過激論者を支持するのですか。」

「ある意味ではそうだ。だが過激論を支持するのではなく、やたらな近代化プランとアフガン人をなめた業績主義に対する人々の反発に同情する

ということだ。」

「確かに、当のガフリ氏も無意味だと言っていました。しかし、徒に敵に回すことも無意味です。」

「当然だ。彼らも、過激論者も、我々の敵ではなからう。和して同せず、敵に回すのではなく、我が道を行くだけだ。いずれこの馬鹿騒ぎも収まる。JAMSがその時本当に人々の役に立つ存在になっているかどうかが問題なんだ。政治的無方針が我々の策だ。」

「日本政府はどう見ているのですか。不利になりませんか。」

私は一瞬答えをためらった。雑誌『エコノミスト』に私が書いた現地報告文の一件以来、不快な噂を耳にしていたからである。これは、一九八八年九月号で、「アフガニスタン難民援助の虚像と実像」と題し、諸外国NGOの過去の援助方式を批判的に総括したものである。この中に「これまでのJICA方式では歯が立つまい」という一文があって、一部の者を刺激したらしい（本当は「頑張つて下さい」というのが真意だったが、偽名の使用もあって、得体の知れぬ印象を与えたのだろう。初めの頃はJICA関係者から「中村医師には近づかぬがよい」と警戒されていたようである。実際には私もJICAも考え過ぎて、その当時、パキスタン有力各紙のジャーナリストに対するテロが活発だったので、家族を現地に抱えていた私は、恐れて偽名を使用したのが真相である）。

だが、この一件を別にしても、これまでの経緯からJAMSという小さな民間団体に、「同

「日本人のよしみ」というだけで大きな援助を期待するのは無理というものである。アフガン人たちも、欧米政府の大規模な自国NGO支援のパターンが、JAMSにも当てはまると誤解しているに違いなかった。

「笑ってくれ。JAMSの「J」は日本の良心のスピリットだけだ。民間側からの補給は貧しい。だが、小さくとも純粋な良心の協力・友好という点においては、誰にも引けを取らない。その積もりで少しずつ無理なくやってくれ。

カスミを食って事業を続ける事はできないだろう。自分としても最大限の努力をするから、補給に見合っただけの活動をするからだ。」

### 信じる

こうしてJAMSは、僅かなペシャワール会からの補給を頼りに、敢えて孤高の道を歩むことを再度確認したのである。予算の伸びを押さえるため、当時のJAMSは総員を三十八名に止どめざるを得なかった。そこでやむをえず、育て上げた二十名の診療員の半分を他所に出したが、シャワリ医師の苦衷は痛いほど伝わった。そのうち一名は下調査で殉職までしたのである。ムーサーやそのかつての配下は、ライフルを捨ててJAMSの活動に投ずる事こそ殉すべきハード（聖戦）と信じ切っていた。彼らは私を信じ、私も彼らを信じた。この真摯さに自分は何を以て報いたらよからう。

家族が居るからには軽々しく「一命を捧げる」などという決心はできない。日本側の問題でこの事業が分解する時は、せめて腕の一本くらいは切り落として彼らに捧げ、詫びを乞おう、と思った。